【3】後期仏教聖典（B 文献）の「摩訶迦葉」資料

［0］ここでは後期仏教聖典すなわち B 文献に見いだされる摩訶迦葉のエピソード資料を紹介する。ここに含まれるのは *KN.* に含まれる *Apadāna*、 *Jātaka* とパーリの“Aṭṭhakathā ”、および『根本有部律』と漢訳律の諸註釈書、および「仏伝経典」「阿毘達磨」などの諸文献である。

［1］紹介にあたっては、前節の原始仏教聖典（A 文献）のエピソード内容に相応するものを整理番号にしたがって掲げ、前節にないエピソードは最後に掲げる。したがって番号の一致するものはエピソードも一致することになる。ただし正確な一致は求めがたいので、おおよその一致も相応とした。枝番号は相応していない。

なお B 文献の整理番号は*斜体*で《 》あるいは〈 〉で示した。もちろん前節のエピソードに相応する資料がない場合は欠番となる。A 文献のエピソード資料番号は《50》で終わっているが、前節に相応しない後期仏教聖典のエピソード資料については、その整理番号は 100 番台を用いた。もちろんその際には内容が相応するものは資料がまとまるように配慮し、枝番号を付したことは前節と同様である。

またその紹介順序は *Apadāna*、 *Jātaka* とパーリの“Aṭṭhakathā ”、次に『根本有部律』と漢訳の律の諸註釈、その後に「仏伝経典」「阿毘達磨」とした。漢訳律註釈は大正新修大蔵経のページの順序にしたがい、仏伝経典は本『モノグラフ』第 3 号の「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」の紹介順序に準じる。その他については資料数そのものも少ないので、原則を立てないでできるだけ成立順序に従うようにした。

*《1》*釈尊の葬儀（釈尊の入滅を知る・スバッダの暴言・火葬の薪に火がつく）

*〈1-1〉*釈尊が涅槃に入られたとき、大迦攝波は王舎城羯蘭鐸迦池竹林園にいた。大地が揺れ動いたので何事かと観察して、如来が大圓寂に入られたのを知った。そこで「我今既無大師唯依法住」と考えた。また未生怨王勝身之子は信根初發で、これを知ったら熱血を吐いて死ぬだろうと考えて、妙堂殿に菩薩昔在覩史天宮・將欲下生觀其五事・欲界天子三淨母身・作象子形託生母腹・既誕之後踰城出家・苦行六年坐金剛座・菩提樹下成等正覺・次至婆羅疤斯國爲五苾芻三轉十二行四諦法輪・次於室羅伐城爲人天衆現大神通・次往三十三天爲母摩耶廣宣法要・寶階三道下贍部洲於僧羯奢城人天渴仰・於諸方國在處化生利益既周將趣圓寂・遂至拘尸那城娑羅雙樹北首而臥入大涅槃という如来の一代の因縁を如法に圖畫させ、ショックを和らげさせた。

諸壮士は拘尸那城の東門から出て金沙河を渡って繫冠制底で荼毘に付そうとしたが火が燃えなかった。阿尼盧陀は阿難陀に「これは天が大迦攝波を待っているのだ」と解説した。そのとき大迦攝波は大比丘衆を引き連れて、沙羅林の釈尊に会いに行く途中で、一人の外道梵志から「大徳喬答摩已入涅槃。經今七日自滅度」と聞いた。一莫訶羅苾芻は「快哉樂鼓我等從今。免被拘制於諸戒律。云此應作此不應作。此事皆息自今已後。能持不持皆由於我可行者行不須者棄」と言った。しかし他の比丘たちは嘆き悲しんだ。大迦攝波が到着したとき、拘尸那城の人々は金棺を開いて世尊の遺体を見

せ、大迦攝波らは礼足した。

この時四大者宿聲聞があり、具壽阿若憍陳如と具壽難陀と具壽十力迦攝波と具壽摩訶迦攝波であったが、摩訶迦攝波は「大福徳多獲利養。衣鉢藥直觸事有餘」であった。そこで摩訶迦攝波は「我今自辨供養世尊」と考えて、金棺に香木を積むと自然に火がついた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.399 中）

〈1-2〉釈尊は波槃國拘尸那竭城で涅槃に入られた。離車力士たちが荼毘に付そうとしても火がつかなかったのを、阿那律は諸天が摩訶迦葉に如來身を見せようとしているのだと解説した。摩訶迦葉は波婆國に向かってやってくる阿跋外道に逢い、釈尊が 7 日前に涅槃に入られたのを知った。迦葉が到着すると棺から如来の足が出、次いで自然に火がつき供養を終えた。『毘尼母経』巻 3（大正 24　p.817 中）

〈1-3〉諸力士は三度火をつけたが燃えなかった。大迦葉は先に王舎城にいたとき、仏が涅槃に入られようとしているのを知って、世尊の身を見たいと願ったので燃えなかったのである。そこで大迦葉が如来の足を敬礼すると火は燃えた。『仏所行讃』（大正 04　p.052 上）

〈1-4〉それから灯火で三度火をつけようとしたけれども、そのときにはブッダの薪の山は燃えなかった。……道をやってきた摩訶迦葉は清浄な心によって思いをなし、世尊の完全な遺体にまみえたいと思った。その力によって火は燃えなかったのである。大迦葉が急ぎ駆けつけて最高の牟尼に礼拝すると、たちどころに火は自ずからに燃えた。*Buddhacarita*（ 27-72～74）

〈1-5〉釈尊を荼毘に付すための薪は三度火をつけても燃えなかった。遠くないところにいた大迦葉が仏身を見たいと思ったからである。しかし大迦葉が到着して仏の積を礼敬すると即時に自然に燃えた。『仏本行経』（大正 04　p.111 下）

《2》頭陀行を尊ぶ

〈2-1〉釈尊は越祇音聲叢樹におられた。そのとき大目連・迦葉・阿那律・離越・邠耨文陀弗・須菩提・迦旃延・優波離・離垢・名聞・牛呵・羅云・阿難らは舎利弗を訪ねて、何が音聲叢樹の間にあって雅徳を現わすかという話をした。阿難は博聞、離越は独処、阿那律は天眼、迦葉は処閑居・賢聖・服弊衣・知止足・少求・寂然・精進・制心・定意・専修・戒具三昧智慧解脱度知見慧、大目連は大神足、舎利弗は三昧と答えた。世尊はそれぞれを讃められ、「漏尽するまで坐を起たない、これが音聲叢樹にあって奇雅を現わす」と説かれた。『生経』（大正 03　p.080 下）

《8》釈尊は老年の迦葉に糞掃衣を捨てるよう勧める

〈8-1〉佛は室羅伐城の逝多林給孤獨園におられた。その時大迦攝波は城の東園鹿子母舎にいた。迦攝波は釈尊を訪ねると、釈尊は「汝今年衰朽老。所著布糞掃衣極成重滞。此應棄捨。當隨我教依衆而住。受別請食及施主衣。應以刀截并染壞色而守持之」と言われた。迦攝波は教えを受け歡喜して去った。『根本有部律』「波逸底迦 030」（大正 23　p.808 中）

〈8-2〉この時尊者大迦葉は苦行を勤修し身体が疲厭したので、園観処において休息し「事火無懈息」であった。大衆に囲繞され「僧迦梨壞髪爪皆長、諸根淳熟内降伏姪、経行往来所観皆悉知之」であり、…… 彼の尊徳に等しい者はなく、天人の供養する所

であり、大福田として敬恭されていた。世尊に会いたいと思い世尊の所へやってきて、「歓楽異法」の故に世尊の足を礼し一面に座った。世尊は少欲之徳を嘆譽され「汝今迦葉年老形熟……計汝今身不堪勝、此重衣汝年已邁。諸有長者持衣施者便可納受」と言われた。『僧伽羅刹所集経』（大正 04　p.141 下）

〈*8-3*〉釈尊は大迦葉に言われた。「迦葉汝今将邁少年已過老年，復至汝身所著糞掃奢那麁弊之服宣須捨棄、今可取我上妙衣服」と。大迦葉は「私は長夜に阿蘭若にあり、糞掃衣を身に付け、……」と答えた。釈尊は「善哉善哉。大迦葉。汝於来世為多衆生作大利益、作大安楽、安隠無量諸天人民。是故汝今随意所楽住阿蘭若処。汝於随時欲見如来、時時来見」と讃められた。『仏本行集経』（大正 03　p.869 上）

《*9*》説法せよという釈尊の命を断る①

〈*9-1*〉釈尊は「私かお前のどちらかが説法しなければならない」となぜ言われたのか。〔カッサパ〕長老を自身の立場に置くためである（theraṃ attano ṭhāne ṭhapanatthaṃ）。舎利弗と目連もいたけれども、「彼ら（舎利弗と目連は）は久しくとどまらないであろう（ime na ciraṃ ṭhassanti）。カッサパは 120 年の寿命を有する（kassapo pana vīsaṃ vassa-satāyuko）。彼は私が般涅槃した後に、七葉窟（Sattapaṇṇi-guhā）に坐して法・律の結集を行って、私の教説を 5,000 年の期間存続せしめるであろう（pañca-vassa-sahassa-parimāṇa-kāla-pavattanakaṃ karissati）。私の立場に彼を置けば、諸比丘は（私に従順であるように）迦葉に従順であろう」と考えられたからである。*SN.-A.*（vol.Ⅱ　p.173）

〈*9-2*〉釈尊は大迦葉に「汝は今大衆を教誨せよ、後学のために法の深い意義を分別して説け。何故なら汝所教誨則我教訓、汝演法味則我演法味であるから」と言われた。大迦葉は世尊に申しあげた、「如今新学比丘難可覚悟、今日晨旦有二比丘与共競諍、一人論無是目連弟子、一人善説是阿難弟子。二人とも自分の所見に執して譲らない」と。世尊は二人を喚んで「汝等愚人、何為大法諍於勝如」と誡め「所謂持法者、不必多誦習、若少有所聞具足法身行、是謂持法人、以法自将養」と説かれた。『出曜経』（大正 04　p.643 上）

《*12*》半座を分かたれる（摩訶迦葉は釈尊と同じ禅定を得ている・半座を分かたれる）

＊「半座を分かたれた」という資料は【論文 9】に譲りここでは省略する。ただし本稿での論述の材料となるものは残した。

〈*12-1*〉釈尊は祇園精舎におられた。その時釈尊は諸比丘に「私は四禅・四無色定・八解脱行・六通に達したが摩訶迦葉も達している」と説かれた。『仏本行集経』（大正 03　p. 867 上）

〈*12-2*〉（阿難は言う）「大迦葉は如来在世のときに衆人の爲に半坐を請うた（だから迦葉こそ法を伝えるべきである）」と。『増一阿含』序品第 1（大正 02　p.549 中）

《*13*》比丘尼に説法してトゥッラティッサー比丘尼に侮辱される

〈*13-1*〉阿難が摩訶迦葉を請うたのは、利養恭敬のためではなく、ここに業処を求める諸比丘尼があって、彼女らを励まして、業処を説いてもらおうと請うたのである（kamma-ṭṭhānatthikā pan’ ettha bhikkhuniyo atthi. tā ussukkāpetvā kamma-ṭṭhānaṃ kathāpessāmī ti yācati）。阿難自身も三蔵（tepiṭaka）であり、多

聞（bahussuta）であるに拘わらず請うたのは、〔諸比丘尼が〕ブッダに似た者である声聞の（Buddha-paṭibhāgassa pana sāvakassa）法話を信ずべきだと考えるだろうと思って、請うたのである。トゥッラティッサーとは、身体が大きいから（トゥッラといい）ティッサーは名である（sarīrena thūlā, nāmena tissā）。〔彼女が阿難を〕「ヴェーデーハ牟尼（Vedehamuni）」と〔呼んだのは〕「智者牟尼（paṇḍita-muni）」〔の意である〕。なぜなら智者は智慧に属するヴェーダによって励んですべての義務をなすので、それゆえ「ヴェーデーハ」と言われる。彼（阿難）は「ヴェーデーハ」にして牟尼であるということで「ヴェーデーハ牟尼」（vedeho ca so munī cā ti, Vedeha-munī）〔と呼んだのである〕。〔よくもまあ迦葉が阿難様の前で〕「法を説こうなどと思うものだ」とは、三蔵を持し（tipiṭaka-dhara）、法蔵の番人（dhamma-bhaṇḍāgārika）の面前で、自ら林に住み、糞掃衣を着る者が慢心を起こして『私は説法者である』と思って法を説こうなどと思うものだ、の意である。この「よくもまあ」（kiṃ pana, kathaṃ pana）は軽蔑しながら話したのである。〔迦葉はそれを〕「聞いた」とは、他人が来て告げ口したので聞いたのである。〔阿難が我慢してくださいと言ったのに対し、迦葉が阿難に〕「待ちなさい（āgamehi）、友よ」と言ったのは、「やめなさい（tiṭṭha）、友よ」の意である。「サンガがことさらに汝を追及しないように」とは、比丘サンガが過分の機会において汝を追及しないように（mā bhikkhu-saṅgho atireka-okāse taṃ upaparikkhi）という意である。阿難は一比丘尼を抑制せずに、ブッダに似た者である声聞（buddha-paṭibhāgo sāvako）を抑制した。阿難と彼女の間には親愛か愛情があるのだろうと、このように阿難についてサンガが考えないように「やめなさい」と言ったのである。今、自身がブッダに似た者であること（buddha-paṭibhāga-bhāvaṃ）を明かしつつ〔阿難に〕「友よ、汝は思うか……〔世尊の面前で比丘サンガに、世尊と同じ程度に欲・不善法を厭離して、有尋有伺の遠離を生じる、喜楽ある第一禅に到達して過ごす者として紹介されたのは、阿難ではなく私すなわち大迦葉であったことを宣言する〕」などと言ったのである。*SN.-A.*（vol. II　p.175）

＊*SN.-A.*（vol. II　p.175）は *SN*.016-010（vol. II　p.214）の註釈である。なお‘buddha-paṭibhāga-bhāvaṃ’の部分のPTS版は‘buddha-paṭibhāgaṃ’とするが、ChaṭṭhasaṅgāyanaのCD-Rom版にしたがって‘bhāva’を補った。

《*14*》摩訶迦葉の出家（阿難を童子のごとしと非難する・「もと外道」と非難される・自ら出家する・世尊は師私は弟子・糞掃衣を交換する・世尊の嗣子）

〈*14-1*〉摩訶迦葉は以下の偈をとなえた。60劫の昔、摩訶迦葉はウッビッダ（Ubbiddha）という王としてランマカ（Rammaka）という都城に住んでいた。そこから再び天上に生まれ、最後の生において家柄による幸福を得た。婆羅門族に生まれてきて多くの宝を持っていたが、八十俱低の黄金を捨てて出家した（paribbajiṃ）。四無礙解と八解脱と六神通とを証し、仏の教えを実行した（paṭisambhidā catasso vimokhā pi ca aṭṭh' ime chaḍabhiññā sacchikatā kataṃ buddhassa sāsanaṃ）。*Apadāna* 03-01-003（p.033）

〈*14-2*〉阿難長老は25年の間（pañca-vīsati-vassāni）、影のように釈尊の後に従ってい

たので比丘サンガとともに遊行する機会はなかった。だから少年比丘と南山に遊行したのは師の般涅槃の年である（satthu-parinibbāna-saṃvacchare）。師が般涅槃した時に、摩訶迦葉長老は師の涅槃に同席した比丘サンガの中に坐して、法と律の結集のために500人の比丘を集めて「友らよ、我々は王舎城において雨期を過ごしつつ、法と律を結集しよう。汝らは都（王舎城）において入雨安居するために自身の障害を断って、王舎城に集まってください」と言って、自ら王舎城に行った。阿難長老も世尊の鉢と衣を持って、大勢の人々に（釈尊の般涅槃を）知らせつつ舎衛城に行って、そこから出て王舎城に行って、南山に遊行したのである。

トゥッラナンダー尼が「以前に外道であった者（aññatitthiya-pubbo samāno）」と非難したのは長老のこの教えにおける阿闍梨と和尚が知られず（therassa imasmiṃ sāsane n'eva ācariyo na upajjhāyo paññāyati）、自ら衣を着て出家したからである（sayaṃ kāsāyāni gahetvā nikkhanto）。

「他を師とする（aññaṃ satthāraṃ uddisituṃ）」とは世尊をおいて他を自分の師であると、このようにしたことはない（ṭhapetvā bhagavantaṃ aññaṃ mayhaṃ satthā ti evaṃ uddisitaṃ na jānāmi）の意である。

ピッパリ摩納（Pipphalimāṇava）とバッダー・カーピラーニー（Bhaddā Kāpilānī）は「我々は出家しよう（pabbajissāma）」と言って、市場から袈裟汁の黄色の布と瓦鉢を調達して、それぞれ髪を落とし（kasāya-rasa-pītāni vatthāni mattika-patte ca āhārāpetvā aññam aññaṃ kese ohāretvā）、「世にいる阿羅漢たる者、彼らにしたがって私たちは出家するのだ（ye loke arahanto, te uddissa amhākaṃ pabbajjā）」と出家し、袋に鉢を入れて肩に担いで露台から降りた。家の奴隷や雑役夫は誰も気がつかなかった。それから婆羅門村から出て、奴隷村の入り口を通る彼らに、行儀所作によって、奴隷村の住人らが気がついた。彼らは泣いて足にすがって「旦那さま、どうして我々を主なしにされるのですか」と言った。「我々は確かに『三界は燃える草庵のようである（āditta-paṇṇa-sālā viya tayo bhavā）』と考えて出家するのだ。もしも我々が汝らのひとりひとりを奴隷から解放するならば、100年かかっても終わらない。汝らが汝らの頭を清めて自由人になって生きていきなさい」と言って、彼らが泣いているなかを出発した。長老は前方を進みつつ振り返って見て考えた。「このバッダー・カーピラーニーは全閻浮洲の価値を有する女であるが、それが私の後に付き従っている。ある者が『こいつらは出家しても別れられなくて不適当なことをしている（ime pabbajitvā pi vinā bhavituṃ na sakkonti, ananucchavikaṃ karonti）』とこのように考える状況もあるであろう」と、「またある者は心を汚して苦界を満たす者になろう」と考えて、「彼女を捨てて私は行くべきである」という心を起こした。彼は前方を進みつつ二股の道を見て、その分岐点で立ち止まった。バッダーもやってきて敬礼して立った。それから彼女に言った。「お前のような女が私の後に付き従っているのを見たら『こいつらは出家しても別れられない』と考えて、我々に悪意をもつ多くの人々が苦界を満たすことになるだろう。この二股の道でおまえは一方を行きなさい。私はもう一方の道を行こう」と。「そうですね。あなたさま、出家者にとって女は汚れです。『出家しても別れない』という我々の過ちを人は認めるでしょう。あ

なたは一方の道をおとりください。別れましょう」と、３回右繞して、４所で五体投地によって敬礼し、十の爪をそろえた美しい合掌をさしのべて「十万劫の間あたためてきた親愛のきずなが今、破れます」と言って、「あなた方〔男性〕は右生ですから、あなたには右の道がよろしいでしょう。私たち女は左生ですから、私には左道が適当です（tumhe dakkhiṇajātikā nāma, tumhākaṃ dakkhiṇa-maggo vaṭṭati. mayaṃ mātugāmā nāma vāma-jātikā, amhākaṃ vāma-maggo vaṭṭati）」と言って敬礼すると道を進んで行った。彼らが別れた時に大地が「私は鉄囲山と須弥山を支えることができても、あなたがたの徳を支えることはできません」と言っているかのように、咆哮しつつ震え、虚空には雷鳴がとどろき、鉄囲山は叫び声をあげた。

正等覚者は竹林大精舎の香室に坐っていて、大地の震動の音を聞き、「誰のために大地が震動したのか」と考え、「ピッパリ摩納とバッダー・カーピラーニーが私のために無量の成功を捨てて出家した（pippalimāṇavo ca bhaddā ca kāpilānī maṃ uddissa appameyya-sampattiṃ pahāya pabbajitā）彼らの別離の場所に両者の徳の力によってこの地震が生じた。私も彼ら２人を再会させるべきであろう（mayā pi etesaṃ saṅgahaṃ kātuṃ vaṭṭati）」と、香室から出て自ら鉢と衣を持って80の大声聞には声をかけずに３ガーヴタの道のりを迎えに行って（tigāvuta-maggaṃ paccuggamanaṃ katvā）、王舎城とナーランダーの間の多子ニグローダ樹下に結跏して坐された。

……中略……

また「世尊の息子である云々」とは、長老が世尊のおかげで聖なる血統に生まれた（thero bhagavantaṃ nissāya ariyāya jātiyā jāto）ということで世尊の息子なのである。胸に住していて口から出た教誡による出家と具足戒によって自身を確立した者（urena vasitvā mukhato nikkhanta-ovāda-vasena pabbajjāya c'eva upasampadāya ca patiṭṭhitattā）は「胸と口から生まれた」のである。教誡の法から生まれたことから、そして教誡の法によって化作されたことから、「法から生まれ、法によって化作された（ovāda-dhammato jātattā ovāda-dhammena ca nimmitattā dhamma-jo dhamma-nimmito）」〔と言われる〕。教誡の法の相続人、新しい出世間法の相続人に相応しいということで法の相続人（ovāda-dhamma-dāyādaṃ nava-lokuttara-dhammadāyādam eva vā arahatīti dhamma-dāyādo）〔と言われる〕。「〔世尊から〕受け取った麻の糞掃衣を」とは師が着られていた糞掃衣が着るために受け取られたのである。*SN.-A.*（vol.Ⅱ　p.176）

＊これは*SN*.016-011の註釈である。

〈*14-3*〉過去世において摩訶迦葉はVedehaという名の資産家であった。現世では、ピッパリ摩納（Pipphalimāṇava）はマガダ国Mahātittha婆羅門村のKapila婆羅門の第一夫人（aggamahesī）の胎に生れた。バッダーカピラーニー（Bhaddākapilānī）はMadda国Sāgalanagaraのの Kosiya姓（Kosiyagotta）の婆羅門の第一夫人（aggamahesī）の胎に生れた。各々が20歳（vīsatime）と16歳（soḷasame）になったとき、ピッパリの両親が結婚を勧めるので、彼は金細工師に美しい女性像を作らせ、このような女性なら結婚すると約束した。母親は８人の婆羅門にこのような女性を探

すように頼んだ。そしてマッダ国でバッダーを探し当て二人は結婚した。しかし彼らは清浄な生活を続けた。両親が亡くなったので二人は共に出家したが、その時地震が起こった。それによって釈尊は二人の出家を知り、80 人もいる長老の誰とも相談せずに 3 ガーヴタの道のりを唯一人彼を出迎えに赴かれた。そして王舎城とナーランダーの中間にあるバフプッタカ・ニグローダ樹（Bahuputtakanigrodharukkha）の下で摩訶迦葉と会った。摩訶迦葉は「我が師よ、私は声聞弟子です、尊者は私の師です、（sāvako 'ham asmi, satthā me bhante bhagavā sāvako 'ham asmi）」と言い、世尊は三つの教誡によって具足戒を授けられた（tīhi ovādehi upasampadaṃ adāsi）。世尊は摩訶迦葉を随従沙門（pacchāsamaṇa）として出発されたが、少し行かれてから休息された。そのとき摩訶迦葉は自分の着ていた大衣を 4 つに畳んで、世尊の坐処とした。世尊は自分の着ておられた糞掃衣を摩訶迦葉に与えた。摩訶迦葉は 8 日目の明け方に（aṭṭhame aruṇe）阿羅漢果を得た。*AN.-A.*（vol. I pp.163–183）、*SN.–A.*（vol. II p.180）

＊釈尊が摩訶迦葉に会うために 3 ガーヴタを旅されたというのは「急ぎの旅（turita-cārikā）」と呼ばれる。これは *Snp.–A.*（p.440）にも見られる。

〈*14–4*〉（釈尊の教化の事績）釈尊は成道ののち 18 由旬の道を行き 5 人の長老に法輪を転じられ……ウルヴェーラーに行って 螺髻外道にたいし 3,500 の奇跡を示してこれを出家せしめられた。ガヤーシーサ（象頭山）では「燃焼経（ādittapariyāya）」を説いて 1,000 人の 螺髻外道に阿羅漢果を得さしめられた。摩訶迦葉には 3 ガーヴタの所を会いに行って 3 つの教誡を以て具足戒を授けられた（tīhi ovādehi upasampadaṃ adāsi）。（以下 Pukkusa、Mahākappina、Aṅgulimāla 等と続く）*Jātaka* 469 ‘Mahākaṇha-j.’（vol.Ⅳ p.180）

〈*14–5*〉釈尊がこの世に降誕されたころ、摩揭陀国に尼拘律という大城があり、尼拘律という大変な財産家の大婆羅門があった。彼には子がなかったので畢鉢羅樹に祈り、子を授かった。そこで畢鉢羅と名づけられ、また氏族の名から迦摂波とも呼ばれた。この子の姿容は超絶していて光相炳耀なることは贍部金の如きであり、頂は圓きこと蓋の如く、臂は長くして膝を過ぎ、鼻は脩くして且つ直く、眉は高くして長く、額は廣く平正で衆相が具足していた。成長して父は結婚させようとしたが、この子は隠遁を願って、それを阻止するために紫金で女の像を作らせ、このような女が見つかれば妻とします、と約束した。父は四方に人を派遣して、ついに劫比羅城の劫比羅という婆羅門の娘である妙賢という娘を見つけた。迦摂波は彼女も欲を行じる事を願わないことを知って、初婚のときに手を取るのを除いて、後は互いに触れ合わないことを誓って結婚した。二人は 12 年の間一柱観において同居したが、一念も染欲の心を起こすことなく清浄行を修した。父母が亡くなったので、迦摂波は耕作人や牛畜を解放して出家した。

その時菩薩は出家して勤苦林に往かれた。時に迦摂波もこの時において「若於世間是阿羅漢者。我當依彼敬心承事」と考えて家業を捨てて出家した。人々は彼を隠士と号した。そして多子制底のところに住んだ。

この時菩薩は阿蘭若に住し 6 年間の苦行を終えて、菩提樹の下で無上覚を証した。

次いで仙人堕処施鹿林中で五苾芻のために三轉十二行法輪を説かれ、次いで大軍婆羅門および二牧牛女のために説法して正見を生じさせ、留髻外道一千人等を帰仏させ、頻婆娑羅王に見諦させ、王舎城の竹林園に住して大目連と舎利子を度し、室羅伐城に行って勝光王のために少年經を説いて調伏し、次いで勝鬘夫人・毘盧將軍および仙授等をことごとく見諦させた。

そのとき釈尊は隠士迦摂波を教化しようと廣嚴城の多子塔に行って身体を光り輝かせた。迦摂波は光を見て多子塔の釈尊のところに至り、「此是我師我是弟子」と言った。世尊は「如是如是。迦攝波。我是汝師汝是弟子。慇心禮敬」、「我是見者説言我見。我是大師説言大師。我是阿羅漢説言阿羅漢。我是三佛陀説言三佛陀」と告げられ、「實是無知詐言有知、實未曾見詐言曾見、實非大師自言是師、實非羅漢言是羅漢、實非薄伽梵云是薄伽梵、非三佛陀云是三佛陀、此詐僞人、頭便破裂以爲七分。汝迦攝波、我是知者説言我知、我是見者説言我見、我是大師説言大師、我是阿羅漢説言阿羅漢、我是三佛陀説言三佛陀」と言われた。そして善法を敬心に受け、四念処においてよく心を住し、慚愧心を起こすべきことを説かれた。

迦摂波は自分の着ていた軽軟の衣を世尊のために敷き、代わりに世尊の麻糞掃衣を受けた。そして第９日目に阿羅漢果を得た。『根本有部律』「（比丘尼）波羅市迦001」（大正 23　p.908 中）

〈14-6〉大迦葉波は自から其の業を説いて頌して言った。「私は財宝を捨てて出家して仏道を学んだ。私は昔は大明師に遭わず、また彼の声聞衆にも逢わなかったが、袈裟染衣を着る者を見て頂礼して出家を求めた。私は見てこのように出家したとき、仏前に在って衆中に坐していた。衆より起って仏を頂礼し、「仏是我親教師」と言った。そのとき世尊は「汝是弟子、我為師」と言われた。そして妙法を説いてくださった。私は今漏尽を得、私は法中において長子であり、法王力によって衆苦を離れており、仏は「我爲第一於杜多中最爲上」と記して下さった、と。『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.078 中）

〈14-7〉（「立善法上受具」の解説として）王舎城に大変な資産家の婆羅門があって尼駒陀といった。その子の畢波羅延は大人の相をもっており、その妻を跋陀といった。父母が亡くなっても多くの資産が残ったが、「世間にもし応真の阿羅漢があったらこれに就いて出家したいと考え、苦行仙人林に入って 12 年間梵行を修して五通を成就した。釈尊はその時成仏して鹿野苑に初転法輪され、1,000 人の大比丘衆とともに摩竭提国に至られ、若致林中の尼駒樹王の下に住された。釈尊は優吒林にいる畢波羅延童子は教化するに足る者だと観察され、摩竭提国から多子塔に向かわれ、樹下に止住された。童子は自然に心欲を生じて多子塔に行き、世尊が仏だと知って、今こそ出家する時だと知って、「我が姓は迦葉にして字は畢波羅延童子です」と三度言った。世尊は種々の因縁を説き、示教利喜された。そこで童子は須陀洹果を得、「世尊是我師。我是聲聞弟子」と言った。これに対して世尊は四念處・八聖道に親近修行すべきことなどを説かれた。

童子は仏のもとを去って７日７夜して８日の朝に阿羅漢果を証した。釈尊は「汝は阿羅漢果を得た、これが受具足戒である」と説かれた。そこで釈尊は比丘らを集めて

「諸比丘。從今已去。聽汝等立善根上受具。過去諸佛未來諸佛皆立善根上受具。我今亦復如是」と言われた。これが立善根上受具である。

迦葉は四聖種・十二頭陀を行じた。そして迦葉が釈尊に随って行じている時、世尊は樹下に座を敷けと命じられた。摩訶迦葉が僧伽梨を敷くと世尊が「これは柔軟だ」と言われたので、迦葉はそれを世尊に差し上げ、自分は糞掃衣を取った。

爾時釈尊は大比丘僧 1,250 人と倶に、遊行して摩竭提国にある善立摩拘陀樹王下に座られた。その時六群比丘たちは「迦葉は阿若僑陳如等のような善来受具ではない、毘舎離抜祇子比丘のような三語受具ではない、また婆盧波斯那比丘のような白四羯磨受具ではない。迦葉は受具者ではない」と話し合った。…… 迦葉は「世尊は我が為に、多子塔に在られて建立善法上受具し竟ったのであって、得と不得とは仏の所説に随い、これを受行すべきだ」と答えた。『毘尼母経』（大正 24　p.803 下）

〈*14-8*〉爾の時二生（婆羅門）があった。迦葉族の明灯にして、多聞にして身相具し、財盈ち妻は極賢であった。厭捨して出家し、志して解脱道を求め、路多子塔に由り、忽にして釈迦文に遇った。光儀顕れ明耀くこと祠天の幢のごときであった。迦葉は粛然として身を挙して敬し、稽首して足を頂礼し、「尊は我が大師たり、我れは是れ尊の弟子なり。久遠に癡冥を積めり。願くは為に灯明と作されんことを」と言った。仏は彼の二生の心楽んで解脱を崇ぶを知り、清浄軟和なる音で、之に命ずるに「善来」を以てした。……大徳は普く流聞するが故に大迦葉と名づける。『仏所行讃』（大正 04　p.033 下 ）

〈*14-9*〉そのとき、カーシャパの氏姓の灯明であった婆羅門で容姿、姿形、財産に恵まれた者が、その富貴と賢き妻とを投げ棄て、解脱を求めて黄褐色の上衣をとって家を出た。彼はバフプトラカ（多子塔）という名の塔廟のかたわらで金の柱のように燃えているブッダを見て合掌して近づいた。礼拝し終わって声高く申しあげた。「私は弟子です、世尊は私の師であられます。賢者よ、もろもろの暗闇の中で私の灯火とおなり下さい」。如来はこの志願清浄にして解脱を求める者に「善く来た」と言われた。牟尼が教えをわずかばかり説かれたとき、彼はすべての意味を正しく理解したので、無礙弁と年長さからマハーカーシャパ阿羅漢と名づけられた。*Buddhacarita*（23～28）

〈*14-10*〉時に大姓子有り名づけて薬樹生という。金色妙英を捨てて剃頭して袈裟を被、多子野沢において仏の本行を陳べるを見、今始て仏一切智聖師を見るを得、叉手して頂上に戴き、仏に向いて遙に稽首し、「仏は是れ我が聖師、我は是れ仏弟子」と（言った）。仏は妙梵音を以て、慈心にして之に告げて「善来賢明士」と言われた。為に深妙の法を説き、其の塵労聚を散じて即時に果証を逮て、三聖弟子とともに一切智を光顕した。『仏本行経』（大正 04　p.081 下）

〈*14-11*〉偸羅厥叉国に一人の婆羅門があり迦葉といった。三十二相が有り聡明智慧にして四毘陀経・一切書論を誦し、通達せざるところはなく、巨富を持っていた。其の夫人は端正で国を挙げて無双であった。二人は自然に欲想なく、一室に同宿することがなかった。「我れ今佛に随って出家すべし」と、壊色の納衣を着、自ら鬚髪を剃って出家した。天人がこれを知って釈尊が王舎城の竹林園におられることを知らせたので、そこに行く途中、世尊もそれを知って出かけて子兜婆のところで会い、「世尊。今者

是我大師。我是弟子」と敬礼し、釈尊は「我是汝師。汝是我弟子。迦葉当知。若人実非一切種智。而欲受汝為弟子者。頭則破裂。以為七分」と言われた。釈尊は五受陰は苦しみであると説かれ、迦葉は阿羅漢果を得た。迦葉には大威徳が有り、智慧聡明なるがゆえに、大迦葉と名づけるのである。『過去現在因果経』（大正 03　p.653 上）

〈*14-12*〉畢鉢羅耶は出家して、白氎無価之衣を僧伽梨となし、鬚髪を剃って「世間可有大阿羅漢而出家者。我今随其出家修道」と考えた。その時釈尊は晨朝時に阿耨多羅三藐三菩提を証し、爾の時畢鉢羅耶迦葉は是の日に当って夜分を已に過ぎ、日始初めて出ずるに尋いで出家した。その畢鉢羅耶は大迦葉の種姓に生れたがゆえに、世間においては迦葉と呼ばれるのである。

摩訶迦葉は出家して、遊行して摩伽陀国の摩伽陀聚落に到り、那荼陀村王舎大城に至って、多子神祇の処に如来がおられるのを見た。大迦葉は浄心を生じて「世尊。我是世尊声聞弟子。唯願世尊。與我為師。我是世尊声聞弟子也」と言った。世尊は「我今知実言知。見実言見」と言われ、さまざまな教えを説かれた。摩訶迦葉はこの教えを蒙って 7 日を経て 8 日に至って智を生じた。

摩訶迦葉は自分の着ていた僧伽梨衣を世尊のために敷き、これを受けてくださいと願った。世尊は糞掃衣を大迦葉に授けた。そして「若欲知我声聞弟子少欲知足行於頭陀悉具足者。所謂長老摩訶迦葉比丘是也」と仰せられた。『仏本行集経』（大正 03　p. 866 上）

〈*14-13*〉尊者阿難よ、私が遊行生活に入ってちょうど 1 年が過ぎたとき（tathā pravrajito samāno saṃvatsara-paramāye）、王舎城の多子塔において（Rājagṛhasya Bahuputrake cetiye）釈尊に出会った。……私は自分の綿の下衣を釈尊のために広げ、世尊はそこに坐られた。世尊は「お前は、これの代わりに私の大麻の糞掃衣を欲しいと思っているのか」と言って、私に世尊の糞掃衣をくださった。……私は 8 日間は未だ学ぶべき身であったが、9 日目に阿羅漢果に到達した。*Mahāvastu*（vol.Ⅲ　p.050、Jones 訳　vol.Ⅲ　p.056）

《*17*》釈尊が摩訶迦葉の病気を見舞われる

〈*17-1*〉尊者大迦葉は耆闍崛山中にいた。大迦葉は豪族の出で身体が柔軟であり食べるものも甘細で麤麭などを食べたことはなかった。しかし貧窮を憐れんで貧家に乞食して麤悪食を食べたので病気になった。釈尊は大目連を伴って見舞いに往かれると大迦葉は「独座閑房、無有瞻病之人」の状況だった。釈尊が「独り空房に居て、云何んぞ能く此の空山中を楽むや」と問われると「捨天王位為徳不倦、心懐歓喜枸翼瞻視」と答えた。『出曜経』（大正 04　p.657 中）

《*18*》頭陀行第一

〈*18-1*〉大迦葉も戒などの諸々の徳とこの経において付与された諸々の属性によって、〔舎利弗〕長老と同じく〔仏説の経や律の中で〕よく知られており、〔太陽、月、海のように〕目立っていて偉大であると知られる。さらにまた彼に〔ついて語るものには〕「布の交換の経（Cīvaraparivattanasutta）」（*SN*.016-011　vol.Ⅱ　p.217）、「ぼろ布の経（Jiṇṇacīvarasutta）」（*SN*.016-005　vol.Ⅱ　p.202）、「月喩経」（*SN*.016-003　vol.Ⅱ　p.197）〔などからなる〕「迦葉相応」（Candopama

sakala kassapasaṃyutta）と、「大聖種経（Mahā-ariyavaṃsasutta）」（*AN*.004-003-025～029 の 028 vol.Ⅱ　p.027）があり、「〔大迦葉〕長老の出家は最上である（therassa　abhinikkhamanaṃ etadaggaṃ）」と〔言い〕、これらによって偉大性は知られるべきである。なぜなら「是第一品（Etadagga）」（*AN*.001-014-001～007　vol.Ⅰ　p.023）において「私の声聞・比丘たちの間で頭陀行を説く者の第一は摩訶迦葉である」と言われた。*MN.-A.*（vol.Ⅱ　p.246）

＊ただし「大聖種経（Mahā-ariyavaṃsa-s.）」には迦葉の名はあがらない。いかなる①衣、②乞食、③臥具にも満足すべきことと、④修習・捨離の楽の４つの伝統‘vaṃsa’が説かれ、そのアッタカターに頭陀行が説かれる。

＊*MN.-A.*（vol.Ⅱ　p.246）は *MN*.032‘Mahāgosiṅga-s.’（vol.Ⅰ　p.212）の註釈である。

〈*18-2*〉鄔陀夷は逝多林給孤独園を訪れた女性信者たちを案内して大迦葉の住房に来ると「少欲知足にして杜多行を修すること、大師の衆弟子之中に於て威徳尊重にして最も第一と爲す」と紹介した。『根本有部律』「僧伽伐尸沙 002」（大正 23　p.681 下）

〈*18-3*〉仏は「諸比丘中の少欲知足頭陀第一は摩訶迦葉比丘是なり」と授記された。『仏本行集経』（大正 03　p.868 中、p.869 上）

〈*18-4*〉また世尊は言われた。「我弟子中第一比丘にして少欲頭陀は摩訶迦葉、無着少欲は薄拘盧である。此の差別は何であるか」と。そして答えて言われた。「尊者摩訶迦葉がもし好あるいは醜なる食を得たときには、彼は此意なくして食する。尊者薄拘盧がもし好あるいは醜なる食を得たときには、彼は其の好なるを別して食べる。復た次に尊者摩訶迦葉は広識大徳にして、衣食床臥具病瘦医薬を得れば彼は受けて頭陀を行ずる。尊者薄拘盧は少識にして大徳に非ず、亦た衣食床臥具病瘦医薬を得ざれば彼は不等受にして頭陀を行ず。此れ為すこと難からざる少識の比丘にして、不等受にして頭陀を行ずるなり。是が差別である」と。『阿毘曇八犍度論』（大正 26　p.900 上）

〈*18-5*〉摩訶迦葉　清倹知足　常行頭陀　愍諸厮賤　賑済貧之。『賢愚経』（大正 04　p.395 下）

《*22*》摩訶迦葉の紹介（姓は迦毘羅、名は比波羅耶檀那、婦の名は婆陀）

〈*22-1*〉ピッパリ童子（Pipphali-māṇava）はマガダ国のマハーティッタ（Mahātittha）という婆羅門村のカピラ婆羅門（Kapila-brāhmaṇa）の第一夫人の胎に生れた。バッダー・カピラーニー（Bhaddākapilānī）はマッダ国のサーガラ市（Maddaraṭṭhe Sāgala-nagara）のコーシヤという姓の婆羅門（Kosiyagotta-brāhmaṇa）の第一夫人の胎に生れた。*SN.-A.*（vol.Ⅱ　p.191）、*AN.-A.*（vol.Ⅱ　p.175）、*Theragāthā-A.*（vol.Ⅲ p.130）

＊*SN.-A.*（vol.Ⅱ　p.191）は *SN*.016-011（vol.Ⅱ　p.217）の註釈である。

〈*22-2*〉鄔陀夷が精舎を訪れた女性信者を案内し、摩訶迦葉の住房に来たとき、次のように紹介した。これは大婆羅門の勝妙之族の出で、妻の名を迦畢梨といい、身は金色の如きで儀容美麗並ぶものはなかった。これらを唾を吐くごとくに捨てて出家しました、と。『根本有部律』「僧伽伐尸沙 002」（大正 23　p.682 中）

〈*22-3*〉王舎城の近くに新竪立という村があった。これを別の一師や摩訶僧祇は摩伽陀国の王舎大城の一聚落の摩訶娑陀羅（隋に大沢という）という。この聚落に摩訶娑陀羅

という婆羅門村があり、一人の財産家の尼拘盧陀羯波（隋に堪用樹という）という者がいた。この夫人が畢鉢羅樹の下で一人の子を生んだので畢鉢羅耶那（隋言樹下）と名づけた。この子は一切の諸業の繫縛を尽して成熟地一生補処に至った。梵行を修することが望みで結婚することを望まなかったが、父母の懇願に逆らえず、閻浮檀金で作った女の像のような女性とならば結婚すると言った。門師婆羅門がこれを持って四方に探し求め、毘耶離城から遠からぬ迦羅毘迦（隋言赤黄色）という村の富豪である色迦毘羅（隋言黄赤）という婆羅門の娘の跋陀羅迦卑梨耶（隋言賢色黄女）を探し当てた。畢鉢羅耶那は互いに梵行を願うことを確認して結婚した。そこで二人は結婚しても12年の間互いに身体を触れもしなかった。父母が死んだので畢鉢羅耶は出家した。跋陀羅も出家を望んだが、「今しばらく住せよ、自分が師を求めて得られたならば知らせるから、その時に出家せよ」と納得させた。『仏本行集経』（大正03 p.861下）

《23》法を付嘱される

〈23-1〉釈尊は法を授けて阿難に付そうとしたが、阿難は辞して如来が衆人のために法を付し、在世に半座を請うた迦葉がよく任に堪えると言った。大迦葉は年衰えて忘失するところ多いから阿難が任に当たるべきことを勧めた。『増一阿含』序品第1（大正02　p.549中）

〈23-2〉五百結集が終わった時、大迦攝波は阿難陀に言った。「世尊は言教をもって私に付嘱して般涅槃された。私は今また般涅槃に入ろうと思うので、転じて教法を汝に付嘱する。当に善く護持せよ。そして奢搦迦（旧に商那和修という）が出家したら仏教を転じて彼に付せ」と。『根本有部律』「雑事」（大正24　p.409上）

〈23-3〉大迦葉は仏に呵責されたことはない。舎利弗は「汝何以食不淨食」と呵されたし、大目連は「汝何以授未滿二十年人具戒如難陀」と呵されたし、難陀は「汝何以教尼乃至日沒時」と呵されたし、優陀夷は「汝癡人乃與舍利弗論議諍勝」と呵されたし、阿難は「癡人汝何以觸惱上座」と呵されたが、仏は大迦葉を呵責されなかった。其の徳行が深厚で過咎がなかったからであるが、また佛滅後に大法を維持せしめんと欲し、縱使い若し小缺有るも、以て致責しなかったのである。後世の衆生をして深心に尊重せしめんと欲されたからである。『薩婆多毘尼毘婆沙』（大正23　p.528中）

〈23-4〉迦葉は言った。「かつて王舎城において1,250人の比丘たちと『如來滅後誰能持佛法』と籌を行ったとき、私はこの籌を抜いた。なぜなら論中において辯才に制御する者が無いからである」と。仏は迦葉を「善哉善哉。迦葉。汝所利益事。除吾一人。其餘聲聞無能及者」と讃められた。『毘尼母経』（大正24　p.806上）

〈23-5〉ある時釈尊は賢者大迦葉と賢者阿難と弥勒菩薩に言われた。「我れ無数劫よりこのかた是の法を遵習して、乃し無上正真之道を成ず。汝等に手を以て嘱累して相い付す。受持・諷誦して広く人の為めに説け」と。『普曜経』（大正03　p.537下）

〈23-6〉ある時釈尊は弥勒菩薩摩訶薩と大迦葉と長老阿難に言われた。「我れ無数百千億劫に於て仏道を修習し、今阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得て、諸の衆生を利益せんと欲するが為めの故に此の経を演説す。是の如き等の経を汝に付嘱す。汝等受持して広宣・流布せよ」と。『方広大荘厳経』（大正03　p.617上）

〈*23-7*〉釈尊は大徳大迦葉、大徳阿難および弥勒菩薩（Maitreya bodhisattava mahāsattva）に対して話された。「友よ、完全に成就された無上の智慧を私は獲得した。私はこの正等覚を汝らの手に最上の付属によって付属する（yuṣmākaṃ haste paridāmy anuparindāmi）。汝らは自らこのようにこの法門を保持し（svayaṃ caivam imaṃ dharmaparyāyam dhārayata）、他の人々のために詳細に宣説せよ（parebhyaś ca vistareṇa saṃprakāśayata）。*Lalitavistara*（Lefmann 本　p.443、溝口訳　p.393）

〈*23-8*〉仏は諸比丘に言われた。「是摩訶迦葉。我涅槃後。摂護我法及諸戒律。令久住世。当作法会」と。『仏本行集経』（大正 03　p.870 上）

〈*23-9*〉佛が泥洹された後、大迦葉が律藏を集めて大師を宗と爲し、具に八萬法藏を持した。大迦葉の滅後は尊者阿難が次いでまた具に八萬法藏を持した。次で尊者末田地……次尊者舍那婆斯……次尊者優波崛多……。『僧祇律』「摩訶僧祇律私記」（大正 22　p.548 中）

〈*23-10*〉仏は言われた。私の泥洹を尋いで大迦葉等は當に共に分別して、比丘比丘尼のために大依止と作るべし。迦葉は傳えて阿難に付し、阿難は復た末田地に付し、……舍那婆私……優波笈多。優婆笈多後有孔雀輪柯王……。『舍利弗問経』（大正 24　p.900 上）

《*24*》入定して滅度を取らず

〈*24-1*〉大迦摂波は涅槃に入るときには未生怨王に知らせるという約束を思い出して王宮に行ったが、王は睡眠中だったので守門人に「大迦摂波為欲涅槃、来就王門与王取別」と伝言して、鶏足山中に往き、三峯内に草を敷いて坐した。そして「我今宣以世尊所授糞掃衣用覆於身、令身乃至慈氏下生……」と入定すると三峯が身を覆った。後に未生怨王がやって来て荼毘に付そうとすると、阿難陀が慈氏が下生してここにやって来て声聞たちに迦摂波の僧伽胝衣は釈迦牟尼仏の着ておられたものであることを示して、杜多少欲知足を修せしめるために入定して身体を守持しているのであるから焼いてはならない、と言った。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.408 中）

〈*24-2*〉舍利弗は仏に尋ねた。如來はどうして天帝釋や四天大王に告げて、私は久しからずして滅度す。汝らおのおのの方土において我法を護持せよ。私が世を去って後は摩訶迦葉・賓頭盧・君徒般歎・羅睺羅の四大比丘が住して泥洹せずに、我法を流通す、と説かれたのですか、と。『舍利弗問経』（大正 24　p.902 上）

〈*24-3*〉仏は諸比丘に説かれた。「是摩訶迦葉我涅槃後、……尽其形寿。将命終時、入於山間、以神通力住持此身。起如此願、願我此身、勿令散壊、乃至弥勒如来多陀阿迦度三藐三仏陀出見我身也。……於後弥勒得阿耨多羅三藐三佛陀時広顕法教」と。『仏本行集経』（大正 03　p.870 上）

〈*24-4*〉このように聞いています。大迦葉波は王舍城の乞食から帰って鶏足山に登り、「願我此身并納鉢杖久住不壊。乃至経於五十七俱胝六十百千歳。慈氏如来応正等覚。出現世時施作佛事」という願を起こして般涅槃した。後に慈氏仏が出現して「汝等欲見釈迦牟尼佛杜多功徳弟子衆中第一大弟子迦葉波不」と問い、鶏足山の頂を開くと迦葉波が現われて人々を見諦させる、と。『大毘婆沙論』（大正 27　p.698 中）

〈*24-5*〉尊者大迦葉波の如く、骨瑣身を留めて慈尊の世に至る。唯だ堅実の体は久留することを得べし。『倶舎論』（大正 29　p.144 中）

〈*24-6*〉住して命終の後に至らしめるあり。即ち尊者大迦葉波の骨鎖身を留めて慈尊の世に至る如し。唯だ堅実の体のみ久しく留まることを得べし。（仏が化身を留めるのは）此の飲光に異りて肉等を留むべし。有餘師の説く。願力の身を留むること必ず能く死後に至らしめること有ることなし。聖大迦葉の骨鎖身を留むるは、諸の天神の持して久住せしめるに由りてなり。『順正理論』（大正 29　p.755 中）

〈*24-7*〉亦有令住至命終後。即如尊者大迦葉波。留骨瑣身至慈尊世。唯堅実体可得久留。異此飲光応留肉等。有餘師説。願力留身。無有能令至死後。聖大迦葉留骨瑣身。由諸天神持令久住。『顕宗論』（大正 29　p.962 下）

《*26*》摩訶迦葉の妻の物語

〈*26-1*〉バッダー・カーピラーニー（Bhaddā-Kāpilānī）は以下の偈を唱えた。過去世においても摩訶迦葉と私とは夫婦でした。それから没して夫は Mahātittha において Pipphalāyana として生まれました。母は Sumanadevī、父は Kosi 姓（Kosigotta）の再生族（dija）でした。私は Madda 国 Sāgalā 城のカピラ再生族（Kapilassa dijassa）の娘となり、母は Sucīmatī でした。父は私を純金の像に作りあげて愛欲を除いた迦葉勇者に私を与えました。ある時、彼は烏等に喰われている生き物を見て厭離し、私は生えた胡麻が太陽に熱せられて枯れ、それが虫や烏に喰われるのを見て厭離しました。その時彼賢者は出家し（so pabbajī dhīro）、私は彼に従って出家しました（ahaṃ taṃ anupabbajiṃ）。5 年の間私は出家道に住しました（pañcavassāni nivasiṃ paribbājapathe ahaṃ）。仏の養母ゴータミーが出家したとき、私は往詣し仏に教えを受けました。久しからずして阿羅漢果を体得しました。 仏の子であり後継者（putto buddhassa dāyādo）であるよく定をえた迦葉は宿住を知り、天・悪生を見ました。*Apadāna* 04-03-027（p.583）

〈*26-2*〉妙賢は夫の迦攝波が釈尊の弟子となったので、無衣外道の大師晡刺拏のもとで出家した。しかし彼女は大変美しかったので外道たちに犯された。そのとき迦攝波に出会ってこのことを訴えた。迦攝波は大世主のもとで具足戒を与えた。妙賢は美しかったので乞食に出ると、このように美しいのになぜ出家などしたのかといった雑音がうるさいので、乞食に出られなくなった。そこで迦攝波は釈尊の許可を得て自分の得た食物の半分を与えることにした。これを見た吐羅難陀尼は「先與妙賢居一柱觀。十二年中淨修梵行。乃於今日翻有私情。乞食相濟」と侮辱した。そこで迦攝波はこれをやめた。妙賢は発奮して阿羅漢果を得た。

　そのころ父親を殺した未生怨王は後悔して楽しまなかった。大臣は美しい妙賢を見て無理やり法衣を脱がして、王のところに至らしめた。蓮花色尼は悲しんでいる妙賢を見て神通力を教え、王宮から逃れさせた。これを因縁として比丘尼の波羅市迦の第 1 条が定められた。『根本有部律』「（比丘尼）波羅市迦 001」（大正 23　p.911 下）

《*27*》貧民街を乞食する

〈*27-1*〉大迦攝波は阿練若處にあったので鬚髮をやや長くし、破れ納衣を着て逝多林に行き、釈尊は比丘サンガが給孤長者の家にお呼ばれしているのを知って、遅れて行った。

守門人は彼を外道と間違えて中に入れなかった。そこで貧窮孤陋を哀愍拔濟しようと町へ行った。そのとき一人の癩女が米泔を供養しようとして縄が鉢の中に落ちてしまった。女は指でつまみとろうとしたが指も落ちてしまった。迦攝波はこれを知っていたが、そのまま食した。女は迦攝波に心清浄を生じたがゆえに命終して覩史多天に生れた。『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.053 下）

《28》帝釈天が摩訶迦葉に供養する

〈28-1〉ある日摩訶迦葉は 7 日間の禅定から起ち、王舎城に乞食した。その時 500 人の天女が施食しようとしたが、貧者から受けたいとして断った。これを聞いた帝釈天は老いた織師に化作して彼を待ちうけ施食した。帝釈天と見破られウダーナを唱えて天に去った。*Dhammapada-A.*（vol. I　p.423 、Burlingame 訳　Book4-10　p.086）

〈28-2〉癩女が大迦攝波に米泔を布施して命終後に覩史多天に生れたことを知って、帝釈天は福業を修するため醜陋織師に化作して舎支夫人とともに、乞食中の大迦攝波の鉢を天妙食で満たしたが、大迦攝波は天帝と見破った。『根本有部律』「薬事」（大正 24　p.053 下）

《30》ブッダの相続者

〈30-1〉ピッパリ窟に住んでいた摩訶迦葉が 7 日間の禅定から起って乞食に出かけた時、一人の女が炒った米を施食した。その帰途、女は毒蛇に咬まれて死んだが、布施の功徳によって三十三天に生まれ天女になった。その果報を感謝し、摩訶迦葉の岩窟で掃除や給水の奉仕をしたが、三日目になって気がついた摩訶迦葉は追い返した。天女が嘆き悲しんでいると、竹林精舎の香室におられた釈尊がこれを聞いて「我が息子迦葉（mama putta Kassapa）には自己の制御（saṃvarakaraṇa）だけがの義務（bhāra）である」と説明された。*Dhammapada-A.*（vol.Ⅲ　p.006、Burlingame 訳　Book 9-3 p.265）

〈30-2〉ある祭礼の日釈尊が 80 人の長老と 500 人の比丘らとともに乞食のため王舎城に入られた時、500 人の若者が肩に菓子（pūva）の入った篭を背負って園遊のため街から出ていくのに出会った。彼らは釈尊に挨拶はしたが、「菓子を召し上がれ」とは云わなかった。列の後部を歩く摩訶迦葉を見たとき、直ちに好意を持ち「召し上がれ」と差し出した。摩訶迦葉は「木の下に釈尊と比丘たちがおられるから差し上げるように」と答えたので、彼らは引き返して布施した。比丘たちは「彼らは釈尊にも長老たちにも言わなかったのに、迦葉に会うと菓子を差し出した」と話した。これを聞いた釈尊は「我が息子摩訶迦葉（mama putta Mahākassapa）のような比丘は、神と人に好かれる。そのような人には人々は喜んで四事を布施する」と『ダンマパダ』の第 217 偈を唱えられた。*Dhammapada-A.*（vol.Ⅲ　p.286、Burlingame 訳　Book16-7 p.090）

〈30-3〉大迦葉は前世の福の因縁によって富家の梵志種に生れた。諸の愛結を絶除したので仏の法王子となった。『仏五百弟子自説本起経』（大正 04　p.190 上）

《32》「無主作房戒」の制戒因縁

〈32-1〉ある時尊者大迦葉がアーラヴィーに来て行乞した。人々は長老を見て逃げ去った。*Jātaka* 253‘Maṇikaṇṭha-j.’（vol. II　p.282）

〈32-2〉釈尊が祇園精舎におられた時、衆多苾芻が広い房舎を造ろうとして、人を使って営事を行ったため、修行を怠ったり、長者居士に多くの草木・車乗・営作人を要求して施主を悩ませたりしていた。時に具寿摩訶迦摂波は此城辺阿蘭若処に住していたが、このことを聞いて釈尊の所へ往き申し上げたので「造少房学処」を制定された。『根本有部律』「僧伽伐尸沙 006」（大正 23　p.688 上）

《33》阿難との関係

〈33-1〉摩訶迦葉は阿難に対して非常な親しみを持っていたので、阿難が心解脱を得たとき最初に賛辞を贈った。*DN.-A.*（vol. I　p.001）（片山第 2 期 1　p.012）

＊*Khuddakapāṭha-A.*（p.096）、*Samantapāsādikā*（vol. I　p.013）の対応箇所では、迦葉が阿難を称賛する部分が欠落している。

〈33-2〉第一結集の時大迦攝波は阿難の八事を難詰した。この時天人たちは「世尊の正法は久しく住するであろう。この大声聞（大迦攝波）は道において仏と隣す。この八事をもって阿難尊者を難詰するのはこの大声聞が徳において仏に亜するからだ」と話し合った。阿難は罪を再びなさないと誓って、摩訶迦葉に言った。世尊が涅槃されようとしたとき、「阿難陀よ、私の滅度の後は悲しんではいけない。私はお前を大迦攝波に付す」と。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.405 下）

《35》「不失衣界設定」制定の因縁

〈35-1〉釈尊は王舎城の竹林に住されていた。大迦攝波はこの城の西尼迦窟に住しており、布薩会に参加するため河を渡ってくる途中、大衣を濡らして乾くのを待っていたので遅刻した。理由を問われ「我迦摂波年邁衰老、大衣厚重、擎負誠難為斯来晩」と答えた。釈尊は「不離僧伽胝羯磨をなすべし」と制せられた。『根本有部律』「泥薩祇波逸底迦 002」（大正 23　p.712 中）

《37》第一結集を主宰する（結集の発議・結集・阿難の過失を告発する・プラーナ遅れて到着する・チャンナの梵壇）

〈37-1〉釈尊は沙羅双樹のもとでヴィサーカ月の満月の夜明けに（visākha-puṇṇama-divase paccūsa-samaye）般涅槃された。7 日目に（sattāhaparinibbute）スバッダが暴言を吐いたので、比丘 70 万人のサンガの長老である摩訶迦葉（bhikkhu-satasahassānaṃ saṅghatthero āyasmā mahākassapo）は、「私は世尊から『迦葉よ、汝は私が脱いだ麻衣の糞掃衣を着るか（dhāressasi pana me tvaṃ kassapa sānāni paṃsukūlāni nibbasanāni）』と言って〔私と〕衣を共有することで、また『諸比丘よ、私は切望して欲から遠離して不善の法から遠離して有尋・有伺の遠離を生じる喜楽を有する第一禅を成就して過ごす。迦葉も同じぐらい切望して、欲から遠離して不善の法から遠離して有尋・有伺の遠離を生じる喜楽を有する第一禅を成就して過ごす』と、これらの仕方で、九次第定と六神通からなる上人法において〔私を〕ご自身とまったく等しい立場におくことで愛護された（uttarimanussa-dhamme attanā samasamaṭṭhapanena ca anuggahito）。同様に、虚空において手を動かして〔私の〕心が〔何にも〕とらわれないこと、私の修行道（paṭipadā）が月のようであることによって〔世尊から〕私は賞賛されたからである（*SN.*016-003　vol. II　p.197）。そのような〔私〕には〔法と律を結集する以外に〕他の無負債の状態があ

ろうか（法と律を結集しないで負債を返せるか）。世尊は王のように自身の鎧と主権を譲渡することによって（bhagavā rājā viya saka-kavaca-issariyānuppadānena）私を自身の家系を確立させる子（attano kulavaṃsa-patiṭṭhāpakaṃ puttaṃ）であると、『彼（大迦葉）は私のために正法という家系を確立させてくれるだろう（saddhamma-vaṃsa-patiṭṭhāpako me ayaṃ bhavissati）』とお考えになって、私をこの特別な愛護によって愛護し、大なる称賛によって称賛してくださったのだ」と考えて、世尊の教えを結集しようと提案した。

比丘らは「大徳よ、長老が諸比丘を集めてください（tena hi, bhante, thero bhikkhū uccinatu）」と言った。そこで摩訶迦葉は漏尽の比丘 499 人を探した（ekūnapañcasate pariggahesi）。阿難はまだ有学でその中に含まれなかったが、彼を除いては結集を行うことができなかったので、一人を不足させたのである。最初から阿難を選ばなかったのは、他の非難を避けるためである。なぜなら〔大迦葉〕長老は阿難長老を極めて信頼していた（thero hi āyasmante Ānande ativiya- vissattho ahosi）ので、彼を頭に白髪が生じていたのに「この童子は適度をよく知らない」と言って「童子」という語で教誨した。長老〔阿難〕は釈迦族出身で、如来の兄弟（従兄弟）、叔父の息子である（tathāgatassa bhātā cullapituputto）。そこである比丘たちはほしいままに考えて「〔大迦葉〕長老は多くの無学の無碍解を得ていた比丘らを除いて、有学の無碍解を得ていた阿難を選んだ」と非難するだろう。そういう非難を避けつつも「阿難なしには法と律とを結集することはできない。比丘たちの承認を通して私は彼（阿難）をとろう」といって〔最初には〕選ばなかったのである。しかし比丘たちが阿難を推薦したので、摩訶迦葉は阿難も選んだ。

人々は７日間釈尊の遺体を供養し、次の７日間は荼毘に付し、第３の７日間は舎利を供養した。このように 21 日間が過ぎ、ジェッタ月の白分の第５日に舎利を分配した（ekavīsati divasā gatā, jeṭṭhamūla-sukkapakkha-pañcamiyaṃ yeva dhātuyo bhājayiṃsu）。この舎利分配の日に、比丘たちは白二羯磨によって（ñattidutiyena kammena）、王舎城において雨安居を過ごしながら法と律を結集することを決定した。そして摩訶迦葉は比丘らに「友よ、今、汝らには雨安居まで 40 日間の猶予（cattālīsa divasā okāso　ジェッタ月の白分５日からサーヴァナ月の黒分１日＝３月５日から４月 15 日）がある。その間にそれぞれが障害を断ち切っておけ」と言って、自らは王舎城に向かった。他の大長老たちはそれぞれの方角に去り、プンナ長老は 700 人の比丘とともに如来の涅槃のところにやってくる人々を安心させようとクシナーラーにとどまった。阿難は〔世尊が〕いまだ般涅槃されていない以前と同様に、世尊の鉢と衣を持って 500 人の諸比丘とともに祇園精舎まで遊行し、世尊が現前におられる如くにお世話をした。そしてその後王舎城に赴いた。

その時王舎城には 18 の大精舎があったが、釈尊が入滅されたので比丘らが出ていって無人となって荒れていたので、雨安居の最初の１ヶ月間は精舎の修理を行い、中間月に結集を行うことになった。結集は阿闍世王（ rājā Ajātasattu）の外護のもとにヴェーバーラ山腹の七葉窟の入り口（ Vebhāra-pabbata-passe sattapaṇṇi-guhā-dvāre）に建設された集会堂（sannisajjaṭṭhāna）に、南側に北向き

の〔摩訶迦葉〕長老の坐る席を、仮堂の中央に東向きの仏・世尊の座にかわる法座を設けて（dakkhiṇa-bhāgaṃ nissāya uttarābhimukhaṃ therāsanaṃ, maṇḍapa-majjhe puratthābhimukhaṃ buddhassa bhagavato āsanārahaṃ dhammāsanaṃ paññāpetvā）行われた。阿難は結集の前日に有学のままで結集に参加することを恥じ、自分の勤精進が過ぎた（mama pana accāraddha-viriyaṃ）のだと気づいて、精進平等（viriya-samatha）となって心解脱した。摩訶迦葉はそれを讃嘆した。それから長老は律を質問するために自ら自身を選んだ（thero vinayaṃ pucchanatthāya attanā va attānaṃ sammanni）。ウパーリ長老も答えるために〔自ら自身を〕選んだ（Upālitthero pi vissajjanatthāya sammanni）。最初は律がウパーリに問われ、次に法が阿難に問われた。そして長部は阿難に、中部は舎利弗の依止者らに、相応部は摩訶迦葉に、増支部はアヌルッダに受け取られた。*DN.-A.*（vol. I p.001）、*Samantapāsādikā*（vol. I　p.013）

〈*37-2*〉その時大迦攝波は拘尸城にいた。すでに釈尊も舎利子・大目連も滅度を取ってしまったので、正教を灰燼に帰してはならないという天意にしたがって法を結集することになった。そこで大迦攝波が上首となって 499 人の阿羅漢を集めた。牛主のみは来ず、釈尊の滅度を聞いて自分も涅槃に入ってしまったからである。阿難陀はその時点では未だ阿羅漢になっていなかったが、白二羯磨によって行水人として加えられた。此処でという意見や、摩揭国の菩提樹下でという意見もあったが、摩揭陀国の未生怨の援助を得て王舎城の畢鉢羅巖下で、前夏中に房舎臥具を修繕し、後夏時に結集することになった。大迦攝波は呵責をもって阿難陀を導くために、衆中で女人の出家を世尊に願ったことなどの８つの罪を糾弾したので、阿難陀も心解脱を得た。この時諸天は「天衆増盛阿蘇羅減。世尊正法必當久住。此大聲聞道隣於佛。以其八事詰彼尊者。是大聲聞徳亜於佛。是故我知佛法不滅」と大迦攝波を讃めたとされている。まず阿難が経を説き阿若憍陳如らがこれを確認し、相應阿笈摩・長阿笈摩・中阿笈摩・増一阿笈摩となした。次に鄔波離が毘奈耶を説き、続いて迦攝波が摩窒里迦を説いて結集を終わった。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.402 下）

〈*37-3*〉釈尊は 2 月 15 日の平旦時に無余涅槃に入られた。迦葉はその 7 日後葉波国から倶尸那国に行く途中で、ある道士から釈尊が入滅されたことを聞いた。そして須跋陀羅摩訶羅の暴言をきっかけに、如来が在世の時には自分に袈裟納衣を施されたし、禅定において仏と異なるところがないと讃嘆されたし、滅度の後は迦葉が正法を護るべしとされたから、自分が中心となって法蔵を集めようと考えた。諸比丘にこれを提案して承認されたので、499 人の漏尽比丘を選んだ。阿難はまだ学地にありその資格はないが、阿難なしに法の結集はできないので加えられた。

結集は衆事具足する王舎城において安居三月に住して行うことになった。如来の涅槃より 7 日間は大会を、次の 7 日間は舎利供養を行い、雨安居までに 1 月半になったので、比丘たちは王舎城に向けて出発した。阿難は如来の袈裟をとって舎衛国に行き、仏のいますが如く給仕した。

そのとき王舎城には十八大寺があったが、如来が入滅されたので捨て去られて荒廃していた。そこでまず阿闍世王の外護のもとに夏の初め 1 月中は寺中を修治し、その

後先底槃那波羅山の禅室門辺に講堂を造った。500 の床座は北向きに作られ、説法の高座は東向きに作られた。阿難は精勤が過ぎたのを反省して中適を取り、結集の前日に阿羅漢果を得た。迦葉は中月 2 日に法堂に入り、そして律蔵を優波離に法蔵を阿難に問い、結集を終えた。『善見律毘婆沙』（大正 24　p.673 中）

〈37-4〉摩訶迦葉は王舎城耆闍崛山竹林精舎に 500 人の大阿羅漢を集めて、結集することを提案した。諸阿羅漢は阿難に須めて経蔵を集めることを提案した。迦葉は阿難が未だ結漏を尽していないことを理由に反対した。しかし経蔵を集めるためには不可欠ということで「求聴羯磨」を行ってサンガの中に入れた。こうして経・律・論蔵を結集した。その後摩訶迦葉は微細戒の義を尋ねなかったことなどにより阿難の七事を責めた。

後からやって来た富蘭那の徒衆は、「從界裏宿食乃至池邊種種草根等」の八事が許されたことを仏より親しく聞いたと主張したが、それは飢饉の時のことであって、後にまた禁止されたことを阿難が証明したので、尊者富蘭那の徒衆は此の語を聞き已って如法に行じた。『毘尼母経』（大正 24　p.818 上）

〈37-5〉時に 500 の阿羅漢は耆闍崛山に還って帝釈巌に集まり、阿難陀の説くごとくに諸経蔵を結集した。『仏所行讃』（大正 04　p.054 上）

《38》「長衣戒」の制戒因縁

〈38-1〉大迦攝波は王舎城側の阿蘭若に住していた。阿難陀は大迦攝波に供養したいというある居士から一枚の上衣を預かった。10 日間に限り長衣を蓄えることが許されることになった。『根本有部律』「泥薩祇波逸底迦 001」（大正 23　p.711 上）

《43》偸羅難陀比丘尼との関係

〈43-1〉大迦攝波は東園鹿子母舎から逝多林給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊が大迦攝波に「汝は老年だから糞掃衣は重かろう、別請食・施主衣を受けなさい」と言われたことを聞いて、一人の長者が迦攝波を食事に招待した。そのとき吐羅難陀苾芻尼も乞食にやって来たので、夫人が今は迦攝波の接待に忙しいというと、「彼是外道出家至愚至鈍。多有諸餘釋迦上族出家具戒。爲大法師三藏俱明詞辯無礙。何不供養乃施餘人」と言った。迦攝波がせき払いすると今度は「彼大龍象已至宅中」と言った。迦攝波は世尊に「今日は一日で毀・誉を得た。私は長い間、闌若に住し、常乞食し、樹下に居し、糞掃衣を著てきました」と報告した。世尊がどうして闌若に住すなどするのかと質問すると、「世尊我見二利。云何爲二。一者於現世中得安樂住。二者於未來世能與多人作大燈炬示其正路」と答えた。釈尊は杜多行を讃められた。『根本有部律』「波逸底迦 030」（大正 23　p.808 中）

〈43-2〉大迦攝波が鹿子母東林住処から乞食に出たとき、吐羅難陀尼は「我今宜可治此愚人」と考えて、先回りしては「この家には熟食はないから先に行きなさい」と迦攝波の乞食を邪魔した。それに気がついた迦攝波は「あなたに罪はない、このような悪行の女類を無理に頼み込んで出家近円せしめた阿難陀の過失である」と言った。これを契機として「苾芻の乞處は苾芻尼は避けて行くべし」と定められた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.357 下）

〈43-3〉（縁処は室羅伐城）吐羅難陀苾芻尼は大衆の中で説法していた。そこへ大迦攝波

がやって来たので、大衆は起ったが吐羅難陀だけは起たなかった。その理由を「彼乃元是外道邪徒。極愚極鈍而來出家。我是釋女從佛出家。博通三藏善閑説法。契合眞理問答無滯。何合見彼從坐起焉」と説明した。釈尊は「從今已後苾芻尼遥見苾芻應從坐起」と定められた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.358 上）

〈43-4〉（縁処は室羅伐城）大迦攝波は城中に乞食に入り、河の水があふれて板がかけてあるところにいるのを吐羅難陀苾芻尼が見つけ、「此愚鈍物今可治之」と板を強く踏んだために、迦攝波は河に落ちた。迦攝波は「あなたに罪はない、このような悪行の女類を無理に頼み込んで仏法内において出家近円せしめた阿難陀の過失である」と言った。釈尊は「自今已後。苾芻尼不應共苾芻同橋上行」と定められた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.359 中）

〈43-5〉（縁処は室羅伐城）大迦攝波が城内に乞食して渠塹のそばを歩いていた。吐羅難陀苾芻尼はこれを見て「我今宜可治此愚人」と考えて、大きな塼を投げ込んだ。汚水がかかったが、迦攝波は「あなたに罪はない、このような悪行の女類を無理に頼み込んで仏法内において出家近円せしめた阿難陀の過失である」と言った。釈尊は「不應以穢惡水汚苾芻衣服」と定められた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.360 上）

〈43-6〉（縁処は室羅伐城）大迦攝波が城内に乞食に入った。吐羅難陀尼はこれをみて傍らに駆け寄り唾を地に吐いて、「極愚極鈍物」とののしった。迦攝波は「あなたに罪はない、このような悪行の女類を無理に頼み込んで仏法内において出家近円せしめた阿難陀の過失である」と言った。釈尊は「苾芻尼見苾芻。不應唾地唱言極愚極鈍」と定められた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.364 下）

《48》受具足戒の種類

〈48-1〉〔「七種得戒法」の中で〕……次に大迦葉は佛所に來詣して言う。「佛よ是れ我が師、我れは是れ弟子。世尊・修伽陀は是れ我が師。我れは是れ弟子」と。是れを「自誓受戒」と名づく。……「自誓」は唯だ大迦葉一人の得なり。更に得る者無し。『薩婆多毘尼毘婆沙』（大正 23　p.510 中）

〈48-2〉〔「十種受具戒」の中で〕……五に「自誓得」なり。摩訶迦葉及三説を謂う。『薩婆多部毘尼摩得勒伽』（大正 23　p.594 上）

〈48-3〉「受教得具足戒」とは、佛迦葉に告げたまわく、「汝應如是學言。我於上中下坐發慚愧心」と。〔また〕佛迦葉に告げたまわく、「汝今應聽一切善法入骨置於心中。我今攝心側耳聽法」と。〔また〕佛迦葉に告げたまわく、「汝應如是學念身而不棄捨。汝迦葉應當學」と。大徳迦葉は「以教授即得具足戒」なり。迦葉の具足戒は皆な是れ佛の神力得なり。『善見律毘婆沙』（大正 24　p.718 上）

〈48-4〉〔「建立善法上受具」の解説の中で〕優波離、佛に問う。幾が處に建立善法上受具の滿足を得るや。佛優波離に告げたまわく。五處に滿足す。何等をか五と爲す。一は「最後邊身」。二は「婆醯破羅伽至婆勒伽」、先に須陀洹果を得る者是なり。三は蘇陀夷に隨順して諸漏已に盡き心に解脱を得る。四は難陀放牛兒。五は今の迦葉の如來受具戒なり。餘の聲聞は非ず。『毘尼母経』（大正 24　p.806 中）

〈48-5〉〔「比丘尼の五種受具」中の「比丘尼の上受具」の項において〕尊者摩訶迦葉と蘇陀耶を除いて其の餘の一切は建立善法上受具を得ず。『毘尼母経』（大正 24

p.807 上）

〈48-6〉律の毘婆沙に十種受具足を説く。所謂①「自起」、謂く佛なり。②「超升離生」、謂く五比丘なり。③「善来」、謂く耶舎等なり。④「師受」、謂く摩訶迦葉なり。⑤「問楽」とは謂く須陀耶なり。⑥「受重法」、謂く摩訶波闍波提なり。⑦「遣使」、謂く法與なり。⑧「律師第五人」、謂く辺地なり。⑨「十衆」、謂く中国なり。⑩「三帰三説」なり。『雑阿毘曇心論』（大正 28　p. 890 下）

〈48-7〉大戒に十種有り。何者をか十と為す。一は「自然得大戒」に由る。佛婆伽婆及独覚の如し。二は「入正定聚得大戒」に由る。憍陳如等五比丘の苦法智忍を得る時の如し。三は「呼善来比丘得大戒」に由る。耶舎等の如し。四は「信受大師得大戒」に由る。摩訶迦葉の如し。五は「答問難得大戒」に由る。須陀夷の如し。六は「信受八尊法得大戒」に由る。大瞿耽弥の如し。七「遣使得大戒」に由る。達摩陳那比丘尼の如し。八は「能持毘那耶為第五於辺地国得大戒」に由る。九は「十部於中国得大戒」に由る。十は「三説三帰得大戒」に由る。六十賢部共集受戒の如し。『倶舎釈論』（大正 29　p. 231 下 ）

〈48-8〉諸毘奈耶毘婆沙師説。有十種得具戒法。何者為十。一由「自然」謂佛独覚。二由「得入正性離生」謂五苾芻。三由「佛命善来苾芻」謂耶舎等。四由「信受佛為大師」謂大迦葉。五由「善巧酬答所問」謂蘇陀夷。六由「敬受八尊重法」謂大生主。七由「遣使」謂法授尼。八由「持律為第五人」謂於辺国。九由「十衆」謂於中国。十由「三説帰佛法僧」。『倶舎論』（大正 29　p.074 中）

〈48-9〉有諸毘奈耶毘婆沙師説。十種得具戒法。何者為十。一由「自然」謂佛独覚自然。謂智以不従師證此智時得具足戒。二由「佛命善来苾芻」謂耶舎等由本願力佛威加故。三由「得入正性離生」謂五苾芻由證見道得具足戒。四由「信受佛為大師」謂大迦葉。五由「善巧酬答所問」謂蘇陀夷。六由「敬受八尊重法」謂大生主。七由「遣使」謂法授尼。八由「持律為第五人」謂於辺国。九由「十衆」謂於中国。十由「三説帰佛法僧」。『順正理論』（大正 29　p.551 上）

《101》120 歳の寿命を有する

〈101-1〉舎利弗は 30 年間、寝台に背をつけなかった。目連も同様であった。摩訶迦葉は 120 年間寝台に背をつけなかった（mahākassapatthero vīsaṃ vassa-sataṃ mañce piṭṭhiṃ na pasāresi）。アヌルッダは 50 年間、バッディヤは 30 年間、ソーナ（Soṇa）は 18 年間、ラッタパーラ（Raṭṭhapāla）は 12 年間、阿難は 15 年間、バクラ（Bakkula）は 80 年間、ナーラカ（Nāḷaka）は般涅槃するまで寝台に背をつけなかった。*DN.-A.*（vol.Ⅲ　p.736）

＊舎利弗については別に 44 年間とする伝承がある。*SN.-A.*（vol. Ⅰ　p.123）

＊*DN.-A*（vol.Ⅲ　p.736）は *DN.*021‘Sakkapañha-s.’（vol. Ⅱ　p.263）の註釈である。

《102》摩訶迦葉の及ばぬこと

〈102-1〉摩訶迦葉はピッパリ窟（Pipphaliguhā）に住していた。ある日王舎城に乞食し、食後「放逸なる者と不放逸なる者の死後と再生（cavanake uppajjanake）」について内観を行じていた。釈尊は竹林園に住してこれを知り、「衆生の死と再生は仏智によっても限定できない（sattānaṃ cutūpapāto nāma buddhañāṇena pi aparicchinno）。

それは摩訶迦葉の及ぶところではなく、佛だけが衆生の死と再生を完全に知ることができる」といって『ダンマパダ』の第 28 偈を唱えられた。*Dhammapada-A.*（vol. I p.258、Burlingame 訳　Book 2-5　p.311）

《*103*》無執着であること

〈*103-1*〉釈尊は王舎城での雨安居の後比丘らと遊行に出発されたが、途中で精舎を空っぽにするのはよくないと考え、親族や支援者の多い摩訶迦葉に戻るように命じられ、彼は引き返した。これを見た比丘らが非難するのを聞いた釈尊は、「彼は親族や資具に執着があるのではない。月の如く執着をはなれており、白鳥が池の中を自由に動くようにどこにも執着しない」と讃められた。*Dhammapada-A.*（vol. II　p.167 、Burlingame 訳　Book7-2　p.198）

《*104*》摩訶迦葉は世尊の足下に坐る

〈*104-1*〉アヌルッダは衣がすり切れたので、ゴミ捨て場で古衣を探していた。3 世前の妻で今は三十三天に住む天女がこれを見て新衣を置いた。彼はこれを見つけ持ち帰った。彼が衣を作ろうとしたとき、釈尊が 500 人の比丘らと精舎にこられた。摩訶迦葉が足もとに（mūle）、舎利弗が中間に（majjhe）、阿難が頭部に（agge）坐り、比丘らは糸を紡ぎ、釈尊は針に糸を通し、目連は行き来して必要なものを供給した。*Dhammapada-A.*（vol. II　p.173 、Burlingame 訳　Book7-4　p.201）

《*105*》摩訶迦葉の共住弟子が強盗になる

〈*105-1*〉摩訶迦葉の共住の比丘は四禅まで入ったが、鍛冶師の叔父の家で色々の物を見て還俗した。しかし仕事をしなかったので家を追い出され強盗団に入って、ついに捕らえられて刑場に引きだされた。摩訶迦葉は乞食の途中これに会い、昔の禅定を思い出させた。彼は四禅に入り刑の執行を恐れなかったので、王に報告され釈放された。王は釈尊にこのことを報告し、釈尊は『ダンマパダ』の第 344 偈を唱えられた。*Dhammapada-A.*（vol.Ⅳ　p.052、Burlingame 訳　Book24-3　p.221）

《*106*》迦葉を「大」迦葉と呼ぶ所以

〈*106-1*〉「摩訶（大）迦葉」とは、偉大なる戒蘊などを具足した己を有する偉大なるカッサパの意である。「摩訶迦葉」とはまたクマーラカッサパとの関わりで、この大長老は「摩訶迦葉」と呼ばれるようになった（Mahākassapo ti mahantehi sīlakkhandhādīhi samannāgatattā mahanto Kassapo ti Mahākassapo. api ca kumārakassapattheraṃ upādāya ayaṃ mahātheroMahākassapo）。「ピッパリ窟において」とはその窟の入り口近くに一本のピッパリ樹があった（tassā kira guhāya dvārasamīpe eko pipphali-rukkho ahosi）、それゆえそれ（窟）は「ピッパリ窟」と知られた。そのピッパリ窟において、の意である。*Udāna-A.*（p.060）

〈*106-2*〉摩訶迦葉とは、ウルヴェーラ迦葉、ナディー迦葉、ガヤー迦葉、クマーラ迦葉というこれらの小小の長老との関わりで、この〔迦葉〕は「大（摩訶）」であり、故に「摩訶迦葉」と言われる（mahākassapo ti uruvelakassapo nadīkassapo gayākassapo kumārakassapo ti ime khuddānukhuddakathere upādāya ayaṃ mahā, tasmā mahākassapo ti vutto）。*AN.-A.*（vol. I　p.163）、*Buddhavaṃsa-A.*（p.049）

〈*106-3*〉大迦葉とは迦葉の名多きが故に「大」を以て之を辯ず。一には大富貴長者の所生なるが故に。二には能く大富貴の豪族を捨てて出家するが故に。三には能く頭陀少欲知足の大法を行ずるが故に。四には國王帝主天龍鬼神多知多識に供養せられるが故に。五には世間の大利養を捨て、少欲知足にして乞食を行ずるが故に。大舍利弗の大智慧を成就するが故の如く、大目連の大神通を成就するが故の如く、大功徳を成就するを以ての故に、兼ねて少欲知足頭陀法を行ずるが故に大迦葉と名づく。『薩婆多毘尼毘婆沙』（大正 23　p.520 下）

《*107*》愚者と伴ってはならない

〈*107-1*〉摩訶迦葉は王舍城の近くの森の中の小屋（araññakuṭikā. *Dhammapada-Aṭṭhakathā* はピッパリ崛 Pipphaliguhā とする）に共住弟子二人と一緒に暮らしていた。このうちの一人が横着者で他の一人の仕事をすべて自分がやったようにするのでこらしめられた。彼はこのことを怨みに思って住処を焼き払った。ある日比丘たちが王舍城から舍衛城にやって来て釈尊に挨拶した。釈尊は「王舍城で教誡する阿闍梨（ovādadāyaka ācariya）は誰か」と尋ねられた。「摩訶迦葉上座です（Mahākassapathera）」と答え、このことを釈尊に知らせた。釈尊は「もし自分より勝れている者を得なければ一人行え、愚者と伴ってはならない」という『ダンマパダ』の第 61 偈を唱えられた。*Jātaka* 321‘Kuṭidūsaka-j.’（vol. Ⅲ　p.071）、*Dhammapada-A.*（vol. Ⅱ　p.019、Burlingame 訳　Book 5-2　p.111）

《*108*》摩訶迦葉の出家時期

〈*108-1*〉釈尊が舍衛城におられた時、諸比丘が説法場に坐して話し合っていた。「師は多くの人々のために行道され、ご自分の安楽な暮しを捨てて世の利益を行われた。最上の悟りに到達してから自ら鉢・衣を持って 18 ヨージャナの道のりを行って五比丘に法輪を転じて〔サヴァナ月の黒〕分の第 5 日に『無我相経（Anattalakkhaṇa-sutta）』を説いて皆に阿羅漢〔果〕を与えられた。ウルヴェーラーに行って螺髪梵志に 3,500 の神変を示して出家させてガヤーシーサ山（Gayāsīsa）において「燃火の法門（Ādittapariyāya）」を説き、1,000 人の螺髪梵志に阿羅漢果を与えられた。摩訶迦葉のために（Mahākassapa）3 ガーヴタの道のりを行って 3 つの教誡によって具足戒を与えられた（tīni ovādehi upasampadaṃ adāsi）。ひとり食後に 45 ヨージャナの道のりを行って良家の息子プックサーティ（Pukkusāti）を不還果に入らせられた。マハーカッピナ（Mahākappina）のために 120 ヨージャナを迎えに行って阿羅漢果を与えられた。ひとり食後に 30 ヨージャナの道のりを行って実に残忍で粗暴であったアングリマーラ（Aṅgulimāla）を阿羅漢果に入らせられた。同様に 30 ヨージャナの道のりを行ってアーラヴァカ〔ヤッカ〕（Āḷāvaka）を預流果に入らせてから〔ボーディ〕王子（kumāra）を安穏にされた。三十三天で 3 カ月を過ごされて神々の 80 億人の法の現観を完成された。梵天界に行ってバカ梵天（Bakabrahman）の邪見を破り梵天の 10,000 人に阿羅漢果を与えられた。毎年 3 つの地域（maṇḍala）を遊行して機根の熟した人々の帰依処となり戒や道果を授けられた。龍や金翅鳥など（nāgasupaṇṇādi）にも多種類の利益を行われた。*Jātaka* 469‘Mahākaṇha-j.’（vol. Ⅳ　p.180）

《*109*》摩訶迦葉の仲のよい二人の共住弟子

〈*109-1*〉釈尊が祇園精舎に住されていたとき、この過去世物語は摩訶迦葉の仲のよい二人の共住弟子について話されたものである。*Jātaka* 498‘Citta-sambhūta-j.’(vol. Ⅳ　p.390)

《*110*》「絵を画くべからず」の因縁

〈*110-1*〉難陀は孫陀羅を思って石上にその像を描いた。大迦葉波はその絵を見て、難陀に「仏は習定と讀誦の二つを作さしめたではないか」と詰問した。難陀は黙っていた。迦葉波は仏に報告して、釈尊は「苾芻不應爲畫」と定められた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.252 上）

《*111*》畢鉢羅窟に住む

〈*111-1*〉釈尊は「凡是客僧來入寺者。先應禮拜耆宿。四人當前而立。主應好心准法安置」と定められた。後に客苾芻たちが夕暮れに王舎城にやって来て「仏は老年者を礼せよ」と定められたというので、まず竹林園にいる阿若憍陳を訪ね、次に畢鉢羅窟にいる大迦葉を訪ね、次に鷲峰山にいる准陀を訪ね、最後に細儞迦窟にいる十力迦葉を訪ねたら夜が明けてしまった。釈尊は「ただ当処の老宿四人に禮謁せしめたのみ」と説かれた。『根本有部律』「雑事」（大正 24　p.381 中）

《*112*》まだ如来が出世していないときに実法に入る

〈*112-1*〉大目揵連は央掘魔羅の問いに答えた。佛世尊の説かれるには病人に三種が有る。邪と正定と不定とである。邪定というのは佛が化すことができないもので、正定というのは大迦葉等が如來が未だ出世しないのに佛によって實法に入るようなものだと。

　そこで央掘魔羅は偈を説いて言った。そのように言ってはならない。上座大迦葉が如來が未だ出世しないのに能く眞實法に入るなどと。その理由は河が雨も降らないのに流れているのは、上流で雨が降っているからであって、大迦葉も仏の流れに従ったのであって、だから「依佛得出家」であると。『央掘魔羅経』（大正 2　p.529 上）

《*113*》迦葉は辟支仏

〈113-1〉迦葉が滅尽定力を用いるのに最勝である所以は、「迦葉本是辟支仏故」なり。『分別功德論』（大正 30　p.030 中）

《*114*》五大精舎を経営す

〈*114-1*〉大迦葉は凡そ五大精舎を經營す。一には耆闍崛山精舎。二には竹林精舎。餘に三精舎有り。時に竹園精舎を治理し、竹園に來詣す。舍利弗の如きは祇洹精舎を經營し、目連は五百精舎を經理す。『薩婆多毘尼毘婆沙』（大正 23　p.528 中）